氏名(国籍)	はん 韓	ひ 希	きよん 暲(韓 国)
学位の種類	博士(芸術学)		
学位記番号	博 甲 第 5138 号		
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	韓国のデザイン教育運動		
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	齊藤泰嘉
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	岡崎昭夫
副査	筑波大学准教授	博士(芸術学)	直江俊雄
副査	筑波大学准教授	博士(デザイン学)	李昇姫

論文の内容の要旨

(目的)

本研究は、1946年から1980年までの戦後の韓国のデザイン教育の変遷を主として高等教育や産業教育における展開を通して考察した論文である。本研究の目的は、韓国のデザイン教育の出発点となった1946年から韓国のデザインが成長期を迎える1970年代末までのデザイン界やデザイン教育の状況を検討し、その発展と特長を明らかにすることにある。

(対象と方法)

本研究は、(1) 高等教育におけるデザイン教育者の活動や彼らの教育内容、(2) 韓国政府による産業デザイン政策と高等教育改革、(3) 民間で発行されたデザイン専門誌、(4) 商業美術・工芸美術・工業美術の出品作品からなる「大韓民国商工美術展覧会」の四つを対象として取り上げ、主として一次資料や二次資料の収集と分析による文献研究、及びデザイン教育者やデザイン編集者へのインタビュー調査、という二つの方法で行っている。

(結果)

本研究の内容は、「序章」、第1章「李順石とソウル大学美術大学の設立」、第2章「アメリカのデザイン教育の導入」、第3章「1970年代における高等教育改革」、第4章「デザイン教育の概念と方向性の展開」、第5章「デザイン概念の普及とデザインカリキュラムの確立」、第6章「産業デザイン教育の定着」、「結章」から構成されている。

序章では本研究の背景と先行研究、本研究の目的・対象・方法、本研究の内容構成が示されている。第1章では、ソウル大学校の美術大学が1946年に設立されたことにより韓国の高等教育におけるデザイン教育が始まるが、その設立と初期の展開を主導した李順石の戦前における日本留学の経歴と彼の1950年代の教育活動を検討した結果、韓国の伝統文化の発展のために必要とされる技術教育として戦前の日本の図案教育が導入されていたことを見出した。

第2章では、アメリカの支援で1957年に設立された「韓国工芸示範所」(KHDC: Korean Handcraft Demonstration Center)によって「デザイン教授要員海外研究プログラム」が実施されるが、そのプログラム

でアメリカに留学する機会を得た留学生のなかで、特に閔哲泓の帰国後の1960年代の教育活動を検討した結果、韓国の高等教育におけるデザイン教育の専門分化が促進され、韓国のデザイン界に工業デザインの概念が導入されたことを見出した。

第3章では、1970年代初期の韓国政府の経済戦略とデザインの専門家養成を検討した結果、1972年に実施された高等教育改革により美術大学におけるデザイン教育内容を再検討すべき契機が生じたことを見出した。

第4章では、デザイン専門誌『デザイン・包装』の1970年代の掲載記事を対象にして、当時のデザイン概念やデザイン教育に対する見解を検討した結果、デザイン概念が製品デザインや産業デザインを意味しており、デザイン概念の混乱が認められ、この年代のデザイン教育の諸問題を解決するために基礎造形教育の強化と産学協同の教育方法の採用が提唱されたことを見出した。

第5章では、デザイン専門誌『デザイン』の1970年代後半の掲載記事を対象にして、デザイン概念の韓国社会への普及と高等教育におけるデザインカリキュラムについて検討した結果、産業デザインとしてのデザイン概念が成立し、高等教育においては米・独・日の大学におけるデザインカリキュラムの研究成果が反映していたことを見出した。

第6章では、1966年に設立された「大韓民国商工美術展覧会」を対象にして、その1970年代末までの変遷を検討した結果、1977年の「大韓民国産業デザイン展覧会」と改称されたことで産業デザインとしてのデザイン概念が韓国社会に普及するとともに、高等教育においても産業デザイン教育が定着したことを見出した。

結章では、本研究の結果・総括、及び今後の課題が述べられている。

(考察)

本研究の各章における結果を総合的に考察すると、(1) 韓国のデザイン教育史には工芸教育として開始され、産業工芸として実施され、最終的に産業デザインとして定着するという展開段階が認められ、(2) 1970年代の韓国のデザイン教育は定着期ではなく教育制度の問題解決のための実験期であり、(3) 先行研究には多くの誤りが認められることからより詳細で正確なデザイン教育に関する歴史研究が必要とされることが明らかとなった。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、戦後の韓国において初めて独自に展開された高等教育や産業教育におけるデザイン教育の変遷を特定の人物・機関・専門雑誌・展覧会などに焦点を当てることを通して記述したものであり、こうした俯瞰的な研究の乏しい現状からすれば、デザイン教育史の基礎的研究として評価に値する。戦後の独立以来の国内外のデザイン教育の展開を文献資料やインタビューに基づいて的確に記述し、それらに考察を加えることにより、いかにして戦前の日本の図案教育から脱して韓国独自の産業デザイン教育が1970年代末において定着をみたのが明確に読み取れる。これが本研究の大きな成果であり、残された1980年代から現在に至るまでのデザイン教育の展開をさらに研究することにより、より包括的な戦後韓国デザイン教育の展開という著作が今後著者には期待される。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。